

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520362

研究課題名（和文）分裂文に関する意味論的・語用論的研究

研究課題名（英文） Semantic and Pragmatic Studies on Cleft Sentences

研究代表者 西山 佑司

(NISHIYAMA YUJI)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：90051747

研究成果の概要（和文）：

分裂文は、文中の要素を焦点として際立たせる構文であり、日本語では「AであるのハBだ」や「AであるのガBだ」の形で、また英語では“*It is that ...*” 強調構文として現れる。本研究では、コピュラ文と名詞句に関する新しい理論を武器にして、分裂文をめぐる意味論的・語用論的問題を検討した。とくに、「社長であるのはあいつだ」と「?殺人犯であるのはあいつだ」の対比に注目し、名詞句Aの指示性の問題と分裂文の意味構造の間の内的関係を追求した。

研究成果の概要（英文）：

A cleft sentence is a construction used to mark an element in a sentence as a focus. Japanese cleft sentences have the forms “*A de aru no wa B da*” and “*A de aru no ga B da*”, while English cleft sentences have the “clefting” form “*It is ... that ...*”. This study gave semantic and pragmatic considerations to various problems concerning (English and Japanese) cleft sentences, through the application of a new and highly effective theory on copular sentences and noun phrases. Specifically, it took notice of the contrast in acceptability between two types of sentences exemplified by “*Shachoo de aru no wa aitsu da*” (It is that guy who is the president.) and “*?Hannin de aru no wa aitsu da*” (It is that guy who is the murderer.) and pursued the internal relation between the referentiality of noun phrase A and the semantic structure of cleft sentences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：分裂文、コピュラ文、変項名詞句、指示的名詞句、叙述名詞句、関連性理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 分裂文に対するこれまでの言語学的研究では、(i)生成文法理論の立場からの統語論的考察、もしくは(ii)談話文法の立場からの「新情報と旧情報」あるいは「前提と焦点」という概念による説明のいずれかが主であり、分裂文自体に対する意味論的・語用論的観点からの考察は十分とはいえなかった。

(2) 本研究メンバーは、1998年以来、本研究の背景となる「名詞句の指示性・非指示性についての研究」および、それを基礎にした「コンピュータ文や存在文に関する意味論的研究」を精力的に行ってきた。それらの研究を集大成した西山(2003)は、「コンピュータ文と多様な構文との間には変項名詞句を介して意味構造上、密接なつながりがある」という仮説を提唱した。この仮説は、言語学界において多大な注目を浴び、活発な議論を呼んだ。

(3) コンピューラ文の一種である分裂文においても、名詞句の指示性・非指示性の意味機能の違いがこの構文の多様な意味構造の形成に決定的に寄与すると予測されるが、この理論的予測を多くの言語データによって検証することがまさに本研究の出発点になった。

2. 研究の目的

(1) 分裂文「AであるのはBだ」が有する多様な意味の決め手になると思われるものは、AおよびBの意味性質、とりわけ「指示性・非指示性」という概念の中身である。本研究は、研究代表者と分担者による名詞句およびコンピュータ文・存在文に関するこれまでの研究成果を分裂文の分析に適用することによって、分裂文のもつ多様な意味構造と情報構造に新しい光を投げかけることを意図するものである。より具体的には、以下の諸問題を取り上げて考察を行う。

- ① 分裂文の定義に、意味論的あるいは談話文法的観点はどこまで要求されるか。
- ② WH-cleft 構文の主語節を、疑問詞の what を先頭にもつ間接疑問節といかに区別すべきか。自由関係節を主語とするコンピュータ文はつねに分裂文であるか。
- ③ it-Cleft 構文と WH-cleft 構文の本質的な違いは何か。
- ④ 分裂文と提示文(presentational sentence)との本質的な違いは何か。
- ⑤ 「ハ分裂文」と「ガ分裂文」との間質的な違いは何か。

(2) 分裂文を、それと一見類似した構文といかに区別すべきか。例えば、英語の it-Cleft 構文を it 外置構文、関係節構文からいかに区別するか。

3. 研究の方法

(1) さまざまなタイプのコンピュータ文の特徴を考察し、その中に現れる名詞句の特性を、定性、指示性・非指示性の観点から明確にすることの意義を再確認する

(2) 分裂文の用法を詳細に検討して、その定義を明らかにする。日本語、英語、ドイツ語、フランス語などの分裂文を取り上げ、動詞文との対応、変項名詞句の関与を手がかりに考察を行う。

(3) 「ハ分裂文」と「ガ分裂文」の違いを明確にするために、Bが格助詞を伴うかどうか、どのような格助詞が許されるか、広くデータを集めて検討する。

(4) 分裂文の使用に関して、近年の語用論モデルである関連性理論(Relevance Theory)による説明の可能性を探る。とくに、「ガ分裂文」「ハ分裂文」の談話における使用条件を関連性理論によってどのように説明するかを検討する。

(5) (i)のように、「ガ分裂文」のなかには、提示文(presentational sentence)としての機能を果たすと思われるものがある。

(i) とくにおすすめなのがこのワインです。このタイプの「ガ分裂文」を英語、ドイツ語、フランス語などの提示文と比較して、提示文の諸特徴を明らかにする。

(6) 分裂文Bの位置に現れる要素の特徴を探る。複数の要素が入ることが可能か、全称量化記号(everybody など)は可能かという問題を、日本語と他言語の分裂文の比較しながら検討する。

これらの作業を効率的に行うため、分裂文に関する資料を集積し、データベースを充実させる。そして、各国語のインフォーマントを活用する。また、研究者間同士の討論のための会合を定期的で開催する。

4. 研究成果

- (1) 日本語においては指定文「あの男が犯人だ」に対応する倒置指定文「犯人はあの男だ」は構築できるが、「犯人であるのはあの男だ」のような分裂文は構築できない。一方、指定文「あの男が病気だ」に対応する分裂文「病気であるのはあの男だ」は構築できるが、倒置指定文「病気はあの男だ」は構築できないことを観察した。さらに、「あの男が社長だ」に対応する倒置指定文「社長はあの男だ」も「社長であるのはあの男だ」のような分裂文も構築できることにも着目し、「AであるのはBだ」の形をとる分裂文を、Aに登場する名詞句の意味の観点から分析した。
- (2) 日本語のG分裂文「とくにおすすめなのがこのワインです」とH分裂文「とくにおすすめなのはこのワインです」の違いはどこにあるかという問題を英語の *it*-cleft 構文と関係づけて検討した。
- (3) 語用論の新しいモデルである関連性理論 (Relevance Theory) の立場から、分裂文「AであるのはBだ」におけるAに自由拡充 (free enrichment) という語用論的操作が適用されるかどうかについて論じた。
- (4) *predicational it*-cleft と呼ばれている「指定の解釈よりも措定の解釈の自然な *it*-cleft 構文」について、広範なデータを用いて分析した。とくに、*proverbial it*-cleft、叙述名詞句の解釈を要求する名詞句が焦点に現れた *it*-cleft、値のあり方を表す *it*-cleft を取り上げ、その特徴を探った。
- (5) 焦点の位置に複数の要素が入ることが可能か、全称量化詞が焦点となりうるかという観点から *it*-cleft、WH-cleft と日本語の分裂文とを比較した。日本語の分裂文は *it*-cleft と類似した特徴を示すことが分かった。
- (6) 分裂文を扱った文献は少なくないが、分裂文に登場する名詞句の指示性や飽和性に着目し、コピュラ文や存在文との関係で分裂文の意味論・語用論を扱っているものは皆無である。本研究は、研究代表者がこれまで行ってきたコピュラ文、存在文の研究を通して実証された「指示的名詞句」「変項名詞句」「非飽和名詞」の概念が、分裂文の分析においても有効であることを検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 小屋逸樹 「『モーツァルトのオペラ』と『オペラのモーツァルト』: 「NP₁のNP₂」の解釈をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 第41号、pp. 189-204. (2010年3月) [査読無]
- ② 西山佑司 「コピュラ文、存在文、所有文: 名詞句解釈の観点から」『言語』 38(4):pp. 78-86, 38(5):pp. 66-73, 38(6):pp. 8-16. 大修館書店 (2009年4月、5月、6月) [査読無]
- ③ 小屋逸樹、辻幸夫 (1番目) 「無助詞文とは何か」『慶應の教養学』 pp. 297-312 (2008年12月) [査読無]
- ④ 小屋逸樹 「「私、困るんです。」—無助詞現象と発話のモード」『教養論叢』 (慶應義塾大学法学研究会) 128号、pp. 45-67. (2008年2月) [査読無]
- ⑤ 西山佑司 「名詞句の意味機能について」『日本語文法』(日本語文法学会) 第7巻2号(2007年10月) [査読有]
- ⑥ 西山佑司 「変項名詞句の意味機能について」JELS 24 (日本英語学会) (2007年3月) [査読有]
- ⑦ 小屋逸樹 「無助詞コピュラ文: その発話行為的性格」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 第38号、pp. 1-20. (2007年3月) [査読無]
- ⑧ 熊本千明 「It-Cleftsの措定の読みについて(2)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第12集第1号、pp. 123-130. (2007年8月) [査読無]
- ⑨ 熊本千明 「It-Cleftsの措定の読みについて(1)」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第11集第2号、pp. 139-146. (2007年1月) [査読無]

[学会発表] (計3件)

- ① 熊本千明 「「入れ替わりの読み」に関する諸問題」 第5回慶應意味論・語用論研究会、於慶應義塾大学、(2009年8月31日)
- ② Chiaki Kumamoto “Semantic and Pragmatic Functions of GA-Clefts in Japanese,” *1st International Conference Discourse Approaches to Functional*

Linguistics, Translation and Foreign Language Teaching (State Higher Vocational School in Włocławek, and Mazowsze Conference Center in Soczewka, Poland) (2008年10月14日)

- ③ Yuji Nishiyama and Koji Mineshima, “FreeEnrichment and the Over-Generation Problem,” *Interpreting for Relevance: Discourse and Translation*, Kazimierz Dolny, Poland (2008年6月18日)

[図書] (計3件)

- ① Chiaki Kumamoto “Semantic and Pragmatic Functions of GA-Clefts in Japanese,” *Advances in Discourse Approaches*, ed. by Marta Dynel, Cambridge Scholars Publishing, pp. 268-287. (2009年6月)
- ② Yuji Nishiyama, “Non-referentiality in Certain Noun Phrases,” in T.Sano, M.Endo, I.Isobe, K.Otaki, K.Sugisaki and T.Suzuki (eds) *An Enterprise in the Cognitive Science of Language :A Festschrift for Yuki Otsu*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing . pp.13-25. (2008年3月)
- ③ Yuji Nishiyama and Koji Mineshima, “Property Expressions and the Semantics-Pragmatics Interface,” in P. Cap & J. Nijakowska (eds) *Current Trends in Pragmatics*. Cambridge:Cambridge Scholars Press. pp.130-151. (2007年9月)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西山 佑司 (NISHIYAMA YUJI)
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：90051747

(2) 研究分担者

熊本 千明 (KUMAMOTO CHIAKI)
佐賀大学・文化教育学部・教授
研究者番号：10153355

(3) 連携研究者

小屋 逸樹 (KOYA ITSUKI)
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：80234904